
悪夢レンサ

誘惑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪夢レンサ

【著者名】

Z5525Z

【作者名】

誘惑

【あらすじ】

悪い夢なんかどうでもいい。 現実が楽しいからそれでいい。

眠る度に悪夢を見る大学生、真夜美月^{マヤミツキ}。悪い夢を気にすること無く、彼女は現実を楽しんでいた。現実生活が楽しくなるにつれ、悪夢は酷くなつていぐ。彼女が悪夢を見る真の理由とは…?

狭くて暗い部屋で、私は何かに押しつぶされた。

朝、カーテン越しに太陽の光を感じながら、 真矢美月は夢から覚めた。

「…また嫌な夢だつた。」

美月の朝は、朝に似つかないボヤキから始まる。 ここ最近ずっとこのような感じだ。

「7時か…。起きよ。」

楽しい夢を見ない。 ありていに言つと、毎日悪夢を見る。陰鬱な気分になる夢ばかり見ていた。

「今日は1限からだつたな。」

美月は大学生だ。 大学入学と同時に1人暮らしを始めた。 悪夢を見るようになつたのはそれからすぐだった。

目覚めの悪さとまだ残る眠気を振り払う為、顔を洗いに洗面台に行く。 とは言うものの、起きたら顔を洗うのは日課だった。

「…今日も楽しい一日になると良いな。」

鏡で自分の顔を見つめながら、美月は呟いた。 眠る度に悪夢を見る。 しかし、美月はそれを気にする事も、悩む事もない。

美月は現実の生活が何よりも楽しかつたからだ。

悪い夢なんかどうでもいい。 現実が楽しいからそれでいい。

美月は鏡に映る自分と、心の中で語り合つた。

午前授業が終わった暁、美月は大学の食堂にいた。

学生たちの声がざわめく学食は美月のお気に入りの場所だ。

同じ学部の友人2人と日替わりランチを食べていた。

「授業つてのは、なんでこんなにもダルいんだろうねー。さつきもほんと寝てたよ。」

向かいに座っている友人、哀川春菜は笑いながら先ほどの授業の感想を言った。

毎日同じ感想を聞いているような気がするのは気のせいだろうか。

ランチに付いてきたスープを飲みながら、美月は思った。

「あんたはマジで毎回寝てるからね。テスト大丈夫なの？」

隣に座る進藤沙里シンドウ サリも、美月が思った事と同じような事を言った。

実際、授業中に春菜を見ると本当に毎回寝ている。大学に入つて半年がたつが、授業中にコイツが

起きている姿を見た事が無かつた。

「大丈夫だよー。先輩から去年の過去問貰つてんだから。今回も平気だつて。」

は能天気に言った。美月と沙里はランチをまだ半分しか食べてないのに、春菜はもう全て胃に収めてしまつていた。

「つてか、いつも思うんだけど、もつとゆっくり食べなよ。消化悪くなるし太っちゃうよ？」

サラダを食べながら美月は言った。

「それも大丈夫！ウチ太らない体质だから。」

春菜は言つた。太るという単語に少しも動じない。

春菜はいつもこんな感じだ。

とにかく明るい。お気楽というか楽天的というか。根っからのムードメーカーなのだろう。

笑顔を絶やさず、口元のえくぼがチャーミングポイントだ。

沙里はそんなとは反対のタイプだ。暗いという訳ではない。同じ年だが年上のような落ち着いた雰囲気を

持つている。眼鏡と白い服が似合ひ、お嬢様という感じだ。

美月は大学に入つてから、いつもこの2人と一緒にいた。

学食でランチに舌鼓を打ちながら、楽しい雑談をするのも日課だつた。

「そういえば春菜、この間の合コンどうだったの？」

美月は春菜に聴いた。春菜は合コン好きで、週末近くになると必ずその話が出ていた。「今度の男は良いの揃いだよー」と。

「ああ、全然ダメ。口クなのが居なかつたわ！」

春菜はうんざりだつたと言いたげな顔で愚痴をこぼした。

「また？この前は良い人揃いつて言つてたじやん。」

お茶を飲みながら美月は言つた。春菜のこの反応は、半ば予想出来ていた。

「ああ、ウチの見込み違いだつたわ。顔も性格もイマイチだし、金も持つてないし！」

だいたい気が利かないのよ！ 合コンで割り勘するー？ 二次会でカラオケ行つたんだけど、

ウチが歌つてる時に一生懸命に曲選んでるし。女の子が歌つてる

時は盛り上るとか、ちゃんと聞くとか
するのが男の甲斐性つてもんじやん！」

春菜は愚痴のスイッチがONになってしまったようだ。

こつなると止まらない。学食中に響き渡るかと思ひょうな声で、マシンガンのように愚痴が飛び出す。

近くに座っていた男グループの背中が、ギリとなく縮んだよつて見えた。

（合図の話題はまずかつたか…。）

少し後悔したが、時すでに遅し。

テーブルの下で、沙里に足を蹴られた。

「…あれ？ 此処つて？」

美月は薄暗い場所に居た。先ほどまで大学にいたはずなのに、なぜこんなところにいるのだろう。

「確か大学で… 2人ご飯食べて… 春菜の愚痴を聴いてて…」

昼の事は思い出せる。しかしそこから先の事が思い出せない。

美月は今自分が居る場所を見渡した。

せまい部屋のようだ。机や本棚はあるようだが、その中にはノートも本も無い。

「ここ…どこ？」

美月は動こうとした。しかし

「…？ 体が動かせない…」

手足はおろか指も動かせない。そして体の感覚も曖昧だ。まるで自分の体ではないようだった

必死に動かそうとするが、ピクリとも動かない。 そればかりか、動かそうとするたびに酷い疲労感

を感じた。まるで体力が削られているようだつた。

「何…なんで…？」

激しい疲労感の中で、美月は恐怖を感じた。

「…き？ 美月？」

自分を呼ぶ声が聞こえた。美月は自分が椅子に座りながら机にうつ伏せになつていることに気付いた。

「美月。授業終わつたよ。」

声がする方向に顔を向けた。沙里だつた。

周りを見渡すと、そこは教室だつた。教科書をしまう者、教室を出していく者、雑談をしている者もいた。

そうだ。たしかご飯を食べた後、2人と次の授業に出て…。美月は学食から出た後の事を徐々に思い出した。

「私…寝てた？」

はつきりしない意識で、沙里に問いかけた。

「寝てたよ。何その漫画みたいなセリフ。」

沙里は言つた。すでに教科書やノートをバッグにしまつていて、時計を見ると、授業が終わつて10分経つっていた。

「あ…ごめん！ 待つてくれたんだ！」

完全に目が覚めて、開きっぱなしの教科書を閉じた。

夢だつたのか。また嫌な夢を見た。

「昨日夜ふかしでもしたの？ 授業始まつてすぐ寝てたよ。」

沙里は珍しそうな顔で言つた。春菜はよく寝ているが、自分は授業中に寝る事はあまりなかつたからだ。

「そういう訳じゃないけど…。そういえば春菜は？」

春菜の姿が見当たらない。まさか先に帰つたのだろうか。

「トイレに行つた。春菜が寝てるの珍しいって言ってたよ。」

沙里は私を起こす役を任されたようだつた。

「そつか。…ところでさ。ノート写させてくれないかな…？」

沙里は笑顔を浮かべながら「カフェでケーキをおごれ。」と言つた。

その後、戻ってきた春菜と3人で、学内カフェに行つた。春菜は「ウチも寝てたよ。もしかして夢の中で会つてたかも！」と、

冗談めいた事を言つていた。

ノートを写し終わり、2人と雑談をしながら、さつきの夢を思い出していた。

悪夢を見るようになつたのは、大学に入つてからすぐだつた。夢占いや心理学の観点から見れば何かの原因があるのだろう。だが、美月は何も思い当らなかつた。

大きな不安も心配事も無い。授業やテストはダルいけど、気を病むほどではない。

何より毎日が楽しいと感じるのに、不安が夢に表れる理由がない。まあ良いか。現実が樂しければ。

美月は2人の友人の話を聞きながら思つた。

美月は走っていた。

左右に高い壁があり、先が見えない程に長く続く通路を、息を切らしながら走っていた。

「はあ…はあ…。いつになつたらここから出られるの…！？」

さつきから何分走っているだろう。走り続けた疲れと、どこまで走り進んでも

変わらない景色で、美月は時間の感覚がマヒしていた。
そもそも何故ここにいるのかも分からなかつた。

走り続ける美月の背後で、獣のようなうなり声が響いた。

美月はこの地獄の底から響くよつた鳴き声を擧げる生物に追いかけられていた。

正体をはつきり見たわけではないが、つかまつたら無傷では済まないと確信していた。

左右には壁があるため、逃げられる方向は前しかない。
迫りくる化け物の気配を背中に感じながら、美月は長い間走り続けていた。

「もうダメ…走れない…！」

美月の体力は限界だつた。

背後の化け物と美月の距離は、徐々に縮まつていつた。

「あつ！」

美月は足がもつれ、転んでしまつた。起き上がるひつと思つたが、体が動かない。

疲れのせいではなく、何かに抑えつけられているかのように、起き上がる事が出来ないのだ。

後ろを振りかえると、体のラインがはつきり見えない、黒く大きな化け物が、目の前に向かつてきていた。

捕まる…！

美月は視界が暗くなつた気がした。

金曜日、学生たちのテンションが一気に高まる週末だ。

翌日が休みなので、授業が終わるとそのまま遊びに行く者もいる。

美月の隣にいる春菜や沙里も例外ではない。

「あー、終わつた終わつた。地獄の責め苦から解放された気分だね。」

大学のメインストリートを歩きながら、美月は言った。
美月の大学は、学部毎に分かれた棟が左右に並ぶ大きな通り道がある。これがメインストリートと呼ばれている。

門からまっすぐに伸びており、どの学部の建物に行こうとしても、必ずここを通る。その為休み時間や授業終わりには多くの学生がいる道だ。

「本当にね。今週はレポートの宿題もないし、ゆっくりできるわ。」
沙里も美月ほどストリートな表現はしないが、同じ心境だ。美月達の学部はレポート課題が多く、週末も忙しいことが多々あった。

「よつしゃー、明日の合コンも気合が入るわ！」

春菜は満面の笑みで言った。

「そのセリフ、金曜日になるとこつも聴いている気がするんだけど

…。」

沙里はなかば呆れ気味に言った。春菜の”合コン”は、もはや週末お決まりのセリフとなっていた。

「やつ? なら間違いなく氣のせいだよ。明日のは期待できるメンツだよー!」

春菜はさらりと受け流して、今週の合コンについて言いだした。

美月は「(間違いなく氣のせいではないな)」と心中で呟いた。

夕方近く、春菜は「明日の勝負服を買いに行く」とい、先に帰つた。

美月は沙里と一緒にいた。

「美月は明日予定あるの?」

沙里は美月に聞いた。

「つーん…特になにもないかな。暇だつたら出かけるかもしけないけど。」

美月は言った。レポート課題がないのは嬉しいが、無いならないで暇をもてあります。美月達にとつてはその暇がなによりの物なのが。

「美月も春菜と一緒に合コンに行つてみれば?」

沙里は笑いながら行つた。よく合コンに参加している春菜だが、美月と沙里は一度も参加した事がなかつた。

2人とも「春菜ほどその場を楽しむことは出来ない」と自分で分かつていたからだ。

「私には合わないよ。つていつか、沙里は予定あるの?」

美月は沙里に聞いた。

「私は部活。明日出かけるんだ。」

沙里は答えた。沙里はあまりプライベートな事は話さないタイプだが、聞けばちゃんと教えてくれる性格だ。

「天文部だったよね。どこ行くの?」

美月は言った。 美月は部活には入っていないが、沙里は入学した時から天文部に入っていた。 星を眺めるのが好きで、星座にも詳しきつたから

天文部に入る事にしたらしかつた。

「天文台に行くの。 景色も良いし、プラネタリウムとかも見れる所だよ。」

沙里は楽しみだと伝わってくる表情で言った。

「へー、良いね。」

沙里の表情を見て、美月にも沙里の楽しみな心境が伝わってきた。 美月は部活に入りたくない訳では無かったが、興味のそそられる部が無かつたのでどこにも入らなかつた。

同好会も見たが、やはり入りたいという気が起きなかつた。

沙里に部活の話を聞く事もあつたが、今まで入らずにいた。

「そうだ。 美月も来てみれば？」

沙里は美月に提案した。 予想外の沙里の言葉に、美月は若干とまどつた。

「え！？いや、それはマズくない？」

美月は言った。

「マズいって、何が？」

沙里は言った。 美月のとまどい具合をみて、キヨトンとした顔だ。

「だつて、私は部員じゃないし…。」

美月は理由を言った。 部員でもない自分が部の活動に参加してはいけないのではないか、と。

「気にすること無いよ。 私が連れて行きたいって言った事にするし、先輩の知り合いで部員じゃない人も、たまに来たりしてるし。」

沙里は美月の心配を和らげるようになつた。

だが、美月の心配はそれではない。

もし明日の活動に参加した後、楽しくないと感じた時の事だ。

楽しいと感じれば、そのまま部員になつてもいい。しかし、自分が

楽しめないのに、一回参加したこと

強制的に部員にさせられてしまうのは困る。また、そうなつてしまふのではないかと不安を感じていた。

「それに、一回行ったから部員になるなんて事はないし、私がさせないよ。」

沙里は言った。それを聞いて、美月は内心驚いた。

沙里は鋭い所がある。第六感というのだろうか。美月が思つてゐる事や感じた事を言い当てられる事がたまにあつた。しかも的確に。

今回も、「自分は部員じゃない」という言葉の裏に隠れた、美月が感じている不安を読み取り、

その不安を取り除く一言を投げかけた。

美月はその一言を聞いて、決めた。

「じゃあ…行つてみようかな。」

沙里はそれを聞いて喜んだ。美月は沙里のその様子を見て、安心できた。沙里は信用できる。

沙里は上手く話を通してくれるし、強制的に入部させられる事も本当に無いだろう…と、自分が心配していた大きな理由は無くなつた。

沙里と話しながら、帰路についた。

明日の天文台は沙里も初めてで、先輩から聞いた話では、とても良い所なのだという。

美月はその話を聞いて、自分が感じていたもう一つの疑問を思った。

沙里と一緒に大丈夫だよね。でも、部員の人に良く思われないんじゃないかな…。

美月は沙里と一緒に歩きながら、僅かに残つた不安を感じていた。

天文台

土曜日。学生が日常の学業生活から解放される休日である。友達と遊ぶ者、一人の時間を楽しむ者、なかには毎週のように合コンに参加する者もいるようだが……。

美月は沙里と共に大学にいた。

美月の大学には各部活の部室が集まつた棟がある。美月が参加することにした天文部だが、

今日はこの部活棟の前に集合する事になつていた。

他の部員はまだ来ておらず、美月と沙里の2人だけだ。

「ねえ、本当に来て大丈夫だつたかな?」

美月は沙里に言った。参加すると決めたのは自分が、やはり心配だつた。

「大丈夫だつて。皆に話しておいたし、参加費も美月の自腹じゃん。」

沙里は心配そうな表情を浮かべる美月に言った。

天文台でプラネタリウムも見るのだが、もちろん無料ではない。

沙里を初めとした天文部の部員は部費として払つているが、美月はもちろん自分で参加費を出す事にした。

「でもやっぱり心配だよ。変な顔されたらどうしよう……。」

美月の心配は沙里の励ましでもぬぐい去れない。

沙里は美月の弱気な言葉をずっと聞いていた。

当たり前である。心配毎からくる弱気な言葉は、誰がなんと励まそうが消えるものではない。

本人は心配事の解決ではなく、言葉として口に出す事で気を紛らわしたいのだ。

ならば聞き手はそれに反論したりせずに聞くべきだろつ。

沙里は意識せずともそれを分かつっていた。

美月が沙里と話している所に、女性が近づいてきた。
天文部の部長である。美月達がその女性に気付いたと同時に、美月
と一緒にいる沙里の姿を見て、話しかけて来た。

「沙里、おはよう！」

挨拶だけで普段も明るいと分かる口調である。
ウェーブがかかった肩までのロングヘアで、目は大きく眼尻がキリ
りとした整った顔をしている。

「おはようございます。あ、美月。こちらは天文部の部長のミナ
モトさん。」

沙里は女性に挨拶を返した。女性は天文部の部長のようだった。

「お、君がウワサの美月ちゃんか。」

ミナモトは美月に笑顔を向けた。とても優しげな顔である。

「は…初めてまして。」

美月は少し緊張気味に挨拶をした。

「沙里から聞いてるよ。今日は一緒に楽しもうね！」

ミナモトは美月に言つた。美月はミナモトの様子を見て、少し安
心した。

「美月つたら、先輩が来る前からずっと不安がつてたんですよ。」

沙里はミナモトに言つた。美月はギクッとした。沙里が鋭いの
はよくわかっていたが、

まさか今の安心まで見抜かれたのか？

「ちょ……ちょつと沙里！」

美月は恥ずかしさから、赤面してしまいそうだ。

「アハハ！ やっぱり。大丈夫だよ。怖い人はいないし、ウチに
はそういうの気にしない人が多いから。」

ミナモトは笑いながら言った。

美月が心配していることは前日に沙里から聞いていた。 その気持ちはミナモトも分かつた。

部員ではないのに活動に参加するなど、不安になるのも無理はない。だが、この天文部はそういうことはあまり気にしなかつた。 現に部員ではない自分の友達も、頻繁にではないが参加することがあった。

割と自由なので、他の部員も気にしていない。 だから美月の参加にも了承したのだ。

「お、噂をすれば・・・。 一番気にしない人が来たよ。」

ミナモトが2人から目をそらしていった。

美月と沙里が振りかえると、車が部室棟前の駐車場に入ってきた。色は白く、ワゴンと乗用車の中間のような形で、流線型のスタイリッシュな車体だ。

駐車場に止まつたその車の運転席から、1人の男性が降りてきた。

「おはよー。」

男性がこちらに向かつて挨拶をした。 美月はその男性を見た途端、心が射抜かれたような気持ちを覚えた。

セツトされた長めの髪に、整つた綺麗な顔立ち。 服装はそれ單体で見れば派手だが、その男性に似合つており、派手さが際立たなくなつてゐる。

美月の思考が止まつっていた。 その男性に見惚れてしまつたのだ。

「おはよー。早いね。」

ミナモトはその男性に言つた。 その声を聞いて、美月は我に返つた。

「早く目覚めちまつてさ。 あ、そつちの子つて噂の？」

男性は美月に気付いた。 その男性と目が合ひ、美月はまた頭が真っ白になりそうだった。

「そう。 美月ちゃんだよ。 美月ちゃん、こちらは秀次。 こい

「いつも部員じゃないんだよ。」

ミナモトは美月に男性を紹介した。 美月は今にもシャーントしてしまいそうな頭を、なんとか持ちこたえた。

「初めまして、秀次です」

男性は改めて、美月に名乗つた。

「あ……は、初めまして！ 真夜美月です！」

美月もそれに答えた。

井ノ石 秀次。 それが男性の名だ。

秀次も部員ではない。ミナモトの友達であり、沙里とミナモトが言っていた”部員じゃないけど時々来る人”である。

外見が良いだけでなく、性格も良い。話し方や雰囲気からは気だるさを感じさせるが、暗い訳ではない。

人当たりが良く、ミナモトや沙里以外の部員とも仲が良く、人気もある。

秀次はミナモトとのメールで、美月の事を聞いていた。

「まあ、俺も部員じゃないんだけどさ、お互い楽しく過ごうやつぜ。」

秀次は美月に言つた。 美月は秀次の姿や声を間近で感じ、今まで感じた事のないような胸の高鳴りを感じていた。

その後、他の部員も集まり、天文部の休日活動が始まった。 その天文台は、もともとは採石場の跡地だったところに作られたもので、自然に囲まれたとても良い景色だった。

ドーム状のプラネタリウム館と、それを囲むように支柱に支えられたループ状の橋がかけられていた。 敷地が広く、近くには綺麗な外観の施設もあり、ただ歩いて回るだけでも楽しい。

プラネタリウムを観た後、橋を渡つて自然を楽しみ、敷地内のレストランで食事をとつた。

美月はその間、秀次の事ばかりを気にしていた。
秀次を見た時に感じた、不思議な感情を思い出しながら、秀次の顔と姿を目で追つていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5525z/>

悪夢レンサ

2011年12月27日21時50分発行